

甘露の變と詩人たち

——李商隱を中心として——

詹 滿 江

はじめに

晩唐の詩人李商隱といえ、**「錦瑟」**や**「無題」**詩に代表される艶麗で繊細なイメージを喚び起こされるのが常であり、人間の様々な感情の中でも、戀愛感情という、とりわけ個人的で微妙な心理を優美に詠じた詩人として、特に評價されている。しかしながら、その一方で**『新舊唐書』**本傳に牛李の二黨にまたがって行動したために無節操だと疎んぜられて一生不遇だったと記されているように、この詩人の政治的側面も、従って、その政治的背景をもつ詩作も、詩人の全體像を捉えるうえで重要である。

小稿で、とくに**「甘露の變」**に視点を置いたのは、この事件をめぐる詩人たちの詩作の中で、李商隱の詩が他の詩人たちの詩とどのよう異なるかを考えることによつて、李商隱の詩の政治的一側面を端的に示しうると思つたからである。¹⁾

甘露の變については贅説を要し²⁾まい。ただ、ここではその大略と、この事件に對する後人の見方について、簡単に述べる。

甘露の變と詩人たち

文宗の大和九年十一月壬戌(二十一日)、天子は紫宸殿においてになり、いつもならば京師の平安を報ずるはずの金吾將軍韓約は、「左金吾廳の後に植わっている石榴の樹に、夜 甘露が降りましたこと、臣禁門を隔てて取り次ぎ奏上いたしました」と申し上げた。これが事件の直接の發端である。宦官誅殺を謀つた李訓と鄭注は、これまでに陳弘志、彼ら二人が文宗に近づききかけを作つた王守澄、楊承和、韋元素、王踐言ら、多くの宦官謀殺に成功してきたのであるが、石榴に甘露が降りたと奏し、それが本當であるかどうかを宦官たちに檢分させ、そこで宮中の宦官を根こそぎ倒そうとした企ては、宦官たちに察知されてしまい、ついに失敗に終わった。主謀者李訓・鄭注はもちろん、この企てに無關係だった宰相王涯、賈餗、舒元興らまでも宦官に捕らえられ、李訓と謀つて鄭注を擁立しようとした大逆罪で殺されてしまうという惨事を招いたのである。

この事件の中心となつた李訓・鄭注については、新舊**『唐書』**、**『資治通鑑』**などに、おおむねは文宗の重任をいいことに放恣を極めた人物として記録されている。例えば**『通鑑』**卷二四五文宗太和九年の條に、

時に鄭注と李訓が憎んだ内臣は、すべて二李(李德裕の黨と李宗閔

の黨の黨人と決めつけられ、貶逐がなされない日とてなく、官籍はほとんど空席になり、朝廷中の者が恐れ騒ぎ、天子もそれを知った。李訓・鄭注は騒動を起こされることを恐れて、九月癸卯の一日、天子に勸めて詔が下され、「李德裕・李宗閔の親戚舊友および門生や故吏にあたる者で、今日より前に貶黜された者の他は、すべてお咎めなし」となって、内臣たちの氣持ちはいくらか落ち着いた。

とみえる。多くの官僚が貶謫されたことは事實であろうが、それはもっぱら李訓・鄭注の恣意によるだけではあるまい。彼らを信任した文宗自らが「河北の賊を去るは難きに非ず、此の朋黨を去るは實に難し」〔舊唐書〕卷一七六李宗閔傳と言ひ、牛李の黨人を嫌っていたのであり、それゆゑ、黨派に屬さない李訓・鄭注を重用して、宦官誅殺を謀らせたのである。それが失敗に終わって、主謀者たちが悪く記されるのは、負ければ賊軍の道理として當然のことであろう。

甘露の變について、後世の人はどのように考えていたか、時代を追って概観してみると、まず、宋の葛立方は『韻語陽秋』卷九に次のように言っている。

唐の太和の末、宦官が專横で、天子は名ばかりの帝位を恥としていた。しかも（憲宗を弑した）元和の逆黨はまだ討伐されず、帝は彼らを全滅させたいと思つてゐた。李訓は、高位にあつて權力を握る者は誰一人として頼むに足らず、ただ鄭注だけが共に事をなすことができると思ひ、二人心を合せて（宦官誅殺を）謀つた。……鄭注は權力を求め、賄賂を貪つたが、しかし、出でて隴右に節度使となり、（李訓・鄭注によつて謀殺された宦官）王守澄の葬儀の際、宦官たちが野邊の送りに參列する機に乗じて、藩

鎮の軍隊を率いてことごとく誅殺しようと思つてゐた。しかし、この謀はやはり必ずしもうまくはいかず、李訓が當初の豫定より五日早く事を起こしたので、結局 甘露の禍を招いたのである。世間の人は成敗によつて人物を論ずるので、李訓・鄭注は忠臣と見做されなかつた。李德裕が（彼ら二人のことを）奴隸のたぐいなど相手にできないと言ふのに至つては、全く甚しいものである。……思うに甘露の變後、宦官仇士良が國柄を窺み、大變な勢力を持つていたので、士大夫たちは意見を述べあう中でも、敢えて李訓・鄭注を正しいと言つて、殺される災難に遇おうとはしなかつたのである。……

葛立方は李訓・鄭注が宦官誅滅に失敗したため、かえつて宦官の勢力を強める結果となり、宦官を恐れる士大夫たちから、公平な評價をされなかつたことを指摘している。

下つて清の王鳴盛は『十七史商榷』卷九一に「訓注皆奇士」と題して次のように言う。

李愬は鄭注を奇士と見做したが、その實李訓も鄭注もともに奇士であり、ただ奇功が成功しなかつただけである。李訓はもともと鄭注によつて天子の側に進められたのに、かえつて鄭注が手柄を立てるのを妬んで、鄭注より先に事を起こした。これは李訓の罪である。もし鄭注の策を用いて、宦官たちがそろつて王守澄の亡骸を送葬するときに乗じて、藩鎮の兵を率いて宦官たちを擒えれば、彼らを誅殺することに何の困難があつたらうか。……天は唐にさいわいせず、（宦官から兵権を取り上げようとした）王叔文は、まず成功せず、李訓・鄭注もやはり成功しなかつた。結局、唐を救うことはできなかったのである。李訓・鄭注はもとよりそ

うひどく責められるべきではない。彼らの傳で、その人を欺く邪悪さや貪婪さを譏っているのは、すべて事實無根である。……それらの譏りの言葉は當時の史官の曲筆によつていないともわかるまい。千載も下つて歴史を讀む人は、李訓・鄭注について、ただ（その宦官誅殺失敗を）残念に思うべきで、彼らを憎むべきではない。……

王鳴盛も李訓・鄭注についての記録は持平の論ではないことを述べている。

近人陳寅恪は『唐代政治史述論稿』中篇「政治革命及黨派分野」に、興味深い論を展開している。陳氏の考えは概ね以下のようである。

牛李の黨争は元和期に始まるが、黨争は士大夫たちだけであつたのではなく、實は宦官の間にもあつた。文宗の治世、宦官は王守澄一派と仇士良一派に分れて拮抗していたが、李訓・鄭注は兩派の争いを利用して宦官の専横を矯めようとしていたのである。また牛李の黨人はやはりそれぞれ宦官の黨派と結びついて政權を争っていたゆゑ、宦官の黨派を滅すと同時に、士大夫の黨派も排斥できるはずだつた。牛李の黨争は實は宦官の黨争の反映であつて、宦官の黨争が主であり、牛李の黨争は従である。李訓らは、當時の士大夫の中の牛李の黨人が宦官の附屬品になりたがつていたのとは、もとより異なるのである。

陳氏の考えは、宦官内部の黨争についてみれば、その特質や實態がいま一つ明確に論究されていないものの、中晩唐の政治を考える上で、重要な視點を提示しているものといえよう。

以上のことから、甘露の變の背景にはかなり複雑な宦官内部の對立や士大夫間の黨争があり、それぞれが結びついたり、反目し合つたりしている中で、この事件の主謀者であつた李訓・鄭注が、どの黨派か

らも支持されない孤立した存在だつたことがわかるのである。そしてそれは同時に文宗皇帝の孤立をも物語っているといえよう。

李商隱が甘露の變を見聞したのは、張采田の『玉谿生年譜會箋』によれば、二十四歳、まだ科擧に及第せず、京師に往來していた。李商隱は事件について「感有り二首」「重ねて感有り」「行きて西郊に次る作一百韻」を作っている。そのうち「感有り二首」については後の諸家に興味深い記述がみられる。

宋の蔡啓はこれらの詩が甘露の變について詠まれたものであることに氣付いて、『若溪漁隱叢話』前集卷二二に引く『蔡寬夫詩話』に次のように述べている。

李義山の詩集に「感有り」という詩が載せてあるが、題らしいものが無く、その自注に「乙卯の年感有り、丙辰の年詩成る」と言っている。詩中に「如何ぞ本初の輩、自ら屈くつの誅を取れるや」とあり、また「蒼黄たり五色の棒、一陽の生ずるを掩おさ遏す」との言葉がある。思うに、李訓と鄭注が亂を起したものは、まさに冬至の日においてであり、その年、太歳は乙卯に在つた。となれば、この詩は李訓と鄭注について作つたのであろう。……

蔡啓より下つて、明の胡震亨は次のように述べる（『唐音癸籤』卷二六）。宦官は恐ろしいが、兵權を掌握した場合がとりわけ恐ろしい。唐人の諷刺で宦官に言及しているのは、顧況の「困」詩、白居易の「司天臺」歌、李商隱の「感有り」二律のほかは聞いたことがない。これらの詩の趣旨についてみても、やはり遠まわしでわかりにくいものばかりである。……

『四庫全書總目』にも、以下のように述べられている（集部別集類「李義山詩集」三卷）提要。

李商隱の詩が世俗に傳誦されるようになると、とかく美しく艶麗な作品ばかりが採られた。たとえば李商隱の集の中には「感有り二首」のような作品があるのに、従来の選集でこれを収めているものはない。さほどでないものを取って優れたものを捨ててしまふのでは、ますます李商隱の本質を見失うことになる。

時を経るに従って、「感有り二首」がより評價されるようになってきたことがわかる。四庫館臣によって評價されたゆえであらうか、「感有り二首」は、その後 初めて清の姚鼎の『惜抱軒今體詩選』(惜抱軒全集所收『五言今體詩鈔』卷九)に採られることになったのである。

二

まず、李商隱以外の詩人たちについて考えてみよう。甘露の變に何らかの形でかかわる詩を詠じているのは、文宗、張祐、白居易、賈島、杜牧である。

文宗はいわばこの事件の當事者であるが、事件後はすっかり宦官の挾制を受け、胸中を察してくれる臣下もなく、孤獨な生活だったようである。事件後のいつであるのかはわからないが、「宮中に題す」詩に「太和九年 李訓・鄭注敗れし後、仇士良愈々專恣、上 登臨遊幸するも、未だ嘗て樂しみと爲さず。或ひは瞋目して獨り語るも、左右敢へて進問する莫し。因つて此の詩を賦す。」と題下の注があり、文宗は次のように詠じている(『全唐詩』卷四、字の異同は省く)。

輦路生春草 輦路 春草生じ
上林花發時 上林 花發く時
憑高何限意 高きに憑れば 何限きの意
無復侍臣知 復た侍臣の知る無し

文宗は實際に高い所に身を置いていたのであろうが、「高きに憑る」という語は、天子の位の高さをも暗示しているように思われる。名ばかりの帝位に空しく即き、腹心の臣下を得ない文宗の孤獨な心が感じられる。しかし、甘露の變にかかわる具體的な思考や主張は全く詠ぜられていない。宦官たちの監視のもとにあってはそれはできなくて當然といえようが。

張祐は譚元學『唐詩人行年考』によれば、事件當時五十四歳、長安にいたという。一生布衣であったが、甘露の變は身近に見聞したはずである。「丁巳の年 仲冬の月 江上にして作る」と題する詩に次のように詠じている(『全唐詩』卷五一)。

南來驅馬渡江濱 南のかた馬を驅り江濱を渡る
消息前年此月開 消息は前年の此の月に聞けり
唯是賈生先慟哭 唯だ賈生先づ慟哭し
不堪天意重陰雲 天意の陰雲を重ぬるに堪へず

この詩が作られたのが、丁巳すなわち開成二年(八三七)であるから、その「前年」とは甘露の變が起きた大和九年(八三五)のことである。張祐自らを賈誼に比しているのは、不遇だった前漢の忠臣に共感を覚えてると同時に、詩人が長沙あたりにおいて詠じたことをも示している。この詩は甘露の變について嘆いてはいるものの、やはり事件に對する詩人の考え方や態度は具體的に表現されていない。

事件の當事者である文宗と事件と無關係の立場にいた張祐とは、どちらも甘露の變について直言せず、婉曲な感情表現のみにとどまっている。文宗は當事者であるがゆえに、張祐は處士ではあってもなお慎重に身を守るために、事件についてあからさまに言及できないのであろう。

白居易は當時六十四歳、太子少傅として洛陽に分司していた。憲宗の治世、諫官として諷諭詩「新樂府」五十首、「秦中吟」十首などを作り、宦官に對しても、彼らが掌る官市の弊を直叙した「賣炭翁」、彼らが掌握する神策軍の横暴を訴えた「輕肥」「紫閣山北村に宿す詩」など、なに憚ることなく直言していた白居易であったが、甘露の變のときはどうであつたらうか。

事件について、白居易は三首の詩を遺しており、その「九年十一月二十一日 事に感じて作る」と題する詩に次のように詠じている（『白香山詩集』後集卷一三、四部備要排印汪立名本による。以下同じ）。

禍福茫茫不可期 禍福は茫茫として期す可からず

大都早退似先知 大都ね早退するは先知の似し

當君白首同歸日 君が白首にして同に歸る日に當るは

是我青山獨往時 是我が青山獨り往く時

顧索素琴應不暇 顧みて素琴を索むるに應に暇あらざるべし

憶牽黃犬定難追 黃犬を牽かんことを憶ふも定めて追ひ難し

麒麟作脯龍爲醢 麒麟は脯と作り龍は醢と爲る

何似泥中曳尾龜 何ぞ泥中に尾を曳く龜に似かんや

「其の日獨り香山寺に遊ぶ」という題下の自注から、白居易は事件當日、香山寺にいて長安からの異變の知らせを聞いたとわかる。この詩については、後人の議論が多く、宋の蘇軾、章惇、洪邁をはじめ、明の瞿佑、胡震亨、清の汪立名にもこの詩をめぐる發言がある。そのうち、蘇東坡は『仇池筆記』巻上に

白樂天は王涯に讒言されて、江州司馬に貶謫された。甘露の變のとき、白樂天の詩に「君が白首にして同に歸る日に當るは、是れ我が青山獨り往く時」と言っているのを、もの分らない人は、

甘露の變と詩人たち

白樂天が人の災難（王涯が甘露の變の巻き添えになったこと）をよろこんでいると受けとっている。白樂天がどうして人の災難をよろこんだりしようか。それを悲しんでいるのだと思う。

と述べている。洪邁『容齋隨筆』卷一、瞿佑『歸田詩話』巻上、汪立名のこの詩の按語も、東坡と同じく、白居易は事件を悲しんでいるとする。一方、『詩人玉屑』巻一六に、

沈括は、白樂天の詩はすべて良いとはいえないが、しかしその思想は尙ふことができると言ったが、章惇は、いやちがう、白樂天の思想は最も淺くて狭いと言ひ、その詩の中で甘露の變について言っているところは、ほとんど人の災難をよろこんでいるかのようである。個人的ならみからすれば氣分がよいであらうが、しかし朝廷がそのような不幸に見舞われているときに、臣下はそれを詩にうたうべきではない（そして「當公白首」の一聯を擧げると言っている）。

とみえ、章惇は東坡とは逆に、白居易は人の災難を喜んでいると考えているとわかる。胡震亨も章惇と同様に考えていることは、『唐音癸籤』巻二五「夢得靖安佳人怨……」の條によつてわかる。

これほど諸家の議論の的となつていふからには、白居易のこの詩がそれだけの問題を含んでいるとみななければならぬ。諸家が引くこの詩の領聯の「白首同歸」とは、晉の潘岳が專恣をきわめた外戚賈謐の仲間として石崇とともに捕らえられ、刑死するに臨んで石崇に言ったことばで、かつて自分が作った詩（『金谷集作詩』）の一句が讒をなしたのである。確かに白居易は元和十年（八一五）、最初遠州刺史に、中書舍人王涯の上言によつて、さらに江州司馬に貶謫された。王涯とはともに同時の翰林學士でもあつた。王涯が災難に遇うことを喜

んでいると受け取られるだけの根據がないわけではない。頷聯はあたかも王涯が處刑されようとするとき、白居易は何の災難にも遇わずひとり隠者のように山を歩いていて、と表現しているかのようである。しかし、汪立名も言っていることであるが、刑死したのは王涯だけではない。白居易が王涯のことだけ言っていると限るまい。白居易はこの詩に續けて「即事重ねて題す」(後集卷一三)に、

重裘煖帽寬氈履 重裘 煖帽 寬氈履

小閣低窗深地爐 小閣 低窗 深地爐

身穩心安眠未起 身穩かに心安く眠りて未だ起きず

西京朝士得知無 西京の朝士 知るを得るや無や

とも詠じている。この詩から讀みとれるのは東都の太子少傅という隠居同然の白居易の暮らしと、それに安住している詩人の心境、そして、異變の起きた西京の士大夫たちに對するいささか突き放したような口吻であろう。王涯に對する個人的な感情よりも、むしろ事件に對する白居易のかなり醒めた反應が興味深い。

白居易はさらに「詠史」詩にも、事件について詠じていること、題下に「九年十一月の作」と注するのによつてわかる(後集卷四)。

秦磨利刀斬李斯 秦 利刀を磨ぎて李斯を斬り

齊燒沸鼎烹鄒其 齊 沸鼎を燒きて鄒其を烹る

可憐黃綺入商洛 憐む可し 黃綺商洛に入り

閒臥白雲歌紫芝 閒かに白雲に臥して紫芝を歌ふ

彼爲渣醢几上盡 彼は渣醢と爲りて几上に盡き

此作鸞皇天外飛 此は鸞皇と作りて天外に飛ぶ

去者逍遙來者死 去る者は逍遙として來る者は死す

乃知禍福非天爲 乃ち知る禍福は天爲に非ざるを

李斯と鄒食其、四皓の中の夏黃公と綺里季とを對比して、甘露の變當時、要職にあった者たちは捕らえられて殺され、白居易自身は洛陽で太子少傅という閑職にあつて災難に遇わずにすんだことを詠じている。この詩からは權勢をほこる者は禍に遇うものという理を主張していることが讀み取れるものの、事件の受けとめ方はやはり傍觀者的といわざるをえまい。甘露の變ほどの大事件に對して、白居易はなぜこうも冷淡な反應しか示さなかつたのであろうか。平岡武夫博士の「七十致仕——白居易の場合——」によれば白居易は、すでに三十九歳のときに致仕に對する心がまえを固めていて、大和九年、すでに河南尹をやめ、太子賓客分司の閑職に就き、同州刺史の任命もことわつて、致仕への用意をしていたという。となれば、白居易の事件についての三首はすべて致仕への準備にむかつていた詩人の心境の表れにほかならない。

賈島は李嘉言の年譜(長江集新校)所收)によれば、事件當時五十七歳、杭州にいた。翌年、長安にもどつて居る。甘露の變が起つた日、たまたま宰相王涯の書齋を訪れていたために、盧仝が卷き添えになつて殺されたことは、おそらく長安にもどつてから知つたであろう。盧仝が甘露の變で殺されたことについては、正史に見えないが、最も早くは『南部新書』壬に、ついで『彦周詩話』および『唐才子傳』卷五にも見えること、井口孝氏「玉川子の詩」に詳しい。賈島は盧仝を悼んで「盧仝を哭す」詩を詠じている(四部叢刊『唐賈浪仙長江集』卷一)。

賢人無官死 賢人 無官にして死し

不親者亦悲 親からざる者も亦た悲しむ

空令古鬼哭 空しく古鬼をして哭せしめ

更得新鄰比 更に新鄰の比ぶを得たり

平生四十年 平生 四十年
 惟著白布衣 惟だ白布衣を著るのみ
 天子未辟召 天子 未だ辟召せざるに
 地府誰來追 地府 誰か來り追はん
 長安有交友 長安に交友有り
 託孤遽棄移 託孤 遽かに棄移せらる

盧全が在野の人であつたことを無位無官のまま死んだといい、一生布衣であつたといひ、まだ天子に召し出されてもいないのに黄泉の國から誰が迎えに來て追ひ立てていったのかと、ことさら強調しているのは、やはり盧全の冤罪を訴えんとしていると讀めば、讀みすぎであらうか。「長安」で始まる聯は、賈島を主體として解釋すれば、長安に君のような友人がいて、孤獨なこの身を寄せていたのに、君が急に死んだので棄て去られてしまったみたいだ、と讀めるが、盧全を主體とすれば、盧全が王涯宅に身を寄せていて、急に事件に巻き込まれて殺されたことを暗に表現していると讀めなくもない。この詩には、盧全の死が唐突で、納得できないものであつたとする賈島の心情が感じられる。しかし、盧全の死の直接の原因である宦官の横暴については默して語らない。

杜牧は繆鉞の『杜牧年譜』によれば、事件當時三十三歳、監察御史として洛陽に分司していた。杜牧は甘露の變について、直接取り上げて詩を作つてはいない。しかし、その友人について詠じた詩の中で、李訓・鄭注、そして事件について觸れている。開成四年（八三九）、杜牧は左補闕となり、「李甘詩」に次のように詠じている（馮集梧注『樊川詩集』卷一、以下卷數のみ示す）。

甘露の變と詩人たち

太和八九年	太和八九年
訓注極虓虎	訓注 虓虎を極む
潛身九地底	身を九地の底に潛め
轉上青天去	轉じて青天に上り去る
.....
九年夏四月	九年夏四月
天誠若言語	天誠 言語の若し
烈風駕地震	烈風 地震に駕し
寧雷驅猛雨	寧雷 猛雨を驅る
夜於正殿階	夜 正殿の階に於て
拔去千年樹	千年の樹を抜き去る
吾君不省覺	吾が君 省覺せず
二凶日威武	二凶 日に威武
操持北斗柄	北斗の柄を操持し
開閉天門路	天門の路を開閉す
.....
時當秋夜月	時 秋夜の月に當り
日直曰庚午	日 庚午と曰ふに直る
喧喧皆傳言	喧喧 皆傳言す
明辰相登注	明辰 相に注を登ぐと
予時與和鼎	予 時に和鼎と
官班各持斧	官班 各々斧を持す
和鼎顧予言	和鼎 予を顧みて言ふ
我死有處所	我が死 處所有り
當廷裂詔書	廷に當りて詔書を裂き

退立須鼎組 退立して鼎組を須たんと

適屬命郎將 適く郎將を屬命す

昨之傳者誤 昨の傳ふる者誤れり

明日詔書下 明日 詔書下り

謫斥南荒去 謫斥せられ南荒に去る

其冬二兇敗 其の冬 二兇敗れ

渙汗開湯吾 渙汗 湯吾を開く

李訓・鄭注に對する杜牧の筆鋒は鋭い。それは友人李甘の無念を思つてである。大和九年當時、侍御史だった李甘は、鄭注が明日にも宰相になるであろうと噂されたとき、「宰相は天に代つて物を治める者にして、當に德望を先にし、文藝を後にすべし。注 何人にして宰相を得んと欲するや。白麻出づれば、我必ず之を饒らん。」(『新唐書』卷一八李甘傳)と明言した。ところが、いざ詔書が出されると、それは鄭注に對するものではなく、趙儻を鄜坊節度使とするものだったのだ。李甘は輕はずみだとされ、封州司馬に貶謫され、配所に没したのである。それゆゑ杜牧は、いま掲げた最後の聯に、その年の冬、李訓・鄭注は敗れて、やつと天子の詔が發せられ、殷の湯王の網の三面が解かれたように、苛酷な刑法がやわらげられたと詠じ、李甘を左遷して死なせた鄭注らが一掃された點で、甘露の變を望ましい結果になつたものとみている。

杜牧はまた、「李給事二首」(卷二)の中でも、甘露の變について觸れている。これらの詩が作られた時期は明らかでないが、『新唐書』

卷一一八李中敏傳によれば、李給事すなわち李中敏は、開成末、婺・杭二州の刺史となり、その官位のまま卒したとあり、杜牧のこれらの詩では李中敏が存命中のことになっているので、開成年間の後期に作られたものと思われる。その第一首に次のように詠じている。

一章絨拜皂囊中 一章絨拜す 皂囊の中

慄慄朝廷有古風 慄慄 朝廷 古風有り

元禮去歸縵氏學 元禮 去りて歸る 縵氏の學

江充來見犬臺宮 江充 來り見ゆ 犬臺宮

紛紜白晝驚千古 紛紜 白晝 千古を驚かし

鉄鎖朱殷幾一空 鉄鎖 朱殷 幾ど一空

曲突徙薪人不會 曲突 薪を徙す 人會せず

海邊今作釣魚翁 海邊 今 釣魚翁と作る

領聯の上句には「李膺 退き罷めて縵氏に歸り、生徒に教授す。給事鄭注を論じ、滿を告げて潁陽に歸る。」と、下句には「鄭注 浴室に對す」と、それぞれ自注がある。

李中敏は、大和六年、大ひでりになって、天子が雨を降らす法をこ下問になったとき、「仍歲 大早あるは、聖德至らざるに非ず、直だ宋申錫の冤濫、鄭注の姦弊を以てするのみ。今 致雨の方、鄭注を斬りて申錫を雪ぐに若くは莫し。」(『舊唐書』卷一七一李中敏傳)と上言したが、容れられなかったので、病氣と任期滿了を理由に故郷へ歸つた(『新唐書』李中敏傳)。そして鄭注は一卷の藥方を文宗に進獻し、文宗は宦官王守澄に命じて鄭注を召し、浴室門で謁見したのだった(『舊唐書』卷一六九鄭注傳)。領聯はこれらのことを詠じている。そして、李中敏の進言を無視して鄭注を用いたために、頸聯で表現するような甘露の變という慘事が起こつたというのである。杜牧は李中敏の進言こ

そは、「曲突新を徒す」といふべき、後の禍いを未然に防ぐものだったと評價している。それなのに一向に認められない不遇な友人の境界を思いやって、杜牧は義憤を感じていたにちがいない。李訓・鄭注、甘露の變に對する杜牧の見方は、一貫している。事件の際の宦官側については全く觸れない。李訓・鄭注を非難する姿勢は、大中二年（八四八）、杜牧が陸州刺史のときに作った「昔文皇帝に事ふ三十二韻」においても變わっていない。それでは、杜牧には、およそ宦官に對する言及はみられないかというところ、そうともいえない。『李給事二首』の第二首に、

晚髮悶還梳 晚髮 悶へて還た梳り

憶君秋醉餘 君を憶ふ 秋醉の餘

可憐劉校尉 憐む可し 劉校尉

曾訟石中書 曾て石中書を訟ふ

消長雖殊事 消長 事を殊にすと雖も

仁賢每見如 仁賢 毎に見如たり

因看魯褒論 因りて魯褒の論を看る

何處是吾廬 何れの處か是れ吾が廬

と詠じ、領聯に「給事 仇軍容に忤ふに因り、官を棄てて東歸す。」と自注を加える。李中敏は甘露の變後、再び官途に就き、累遷して給事中になった。ときに宦官仇士良は自身の品階が開府であることから、その養子に父蔭として官位を授かった。李中敏は「内謁者は監にして安んぞ子有るを得んや」（『新唐書』李中敏傳）と言つて、仇士良を怒らせ、またもや官を辭めたのである。杜牧は、このことを漢の劉向が宦官石顯を退けようとして果さなかつたことになぞらえて詠じている。甘露の變後の宦官仇士良の專横は甚しかった。李中敏のように仇

士良の怒りを買う言動をあえてするものは少かつたはずである。杜牧が李中敏を漢の劉向に比して評價するのも當然であろう。しかし、杜牧は李中敏の行動を善しとはするものの、宦官に對するより積極的な非難のことばを發しようとはしない。

さきに引いた「韻語陽秋」の中で、葛立方は杜牧の「李甘詩」「李給事二首」を擧げ、李德裕の「徒隸の齒と與にすべからず」という發言とともに、李訓・鄭注に對する行き過ぎた非難としている（第一章の引用中では重複を避けて杜牧の詩についての部分を省略した）。確かに杜牧は李訓・鄭注に對して強く筆誅を加えているが、それは友人たちの受けた仕打ちからすれば、心情的に納得できるものであると思われる。そのうえ、李訓・鄭注は逆賊として殺されたことになっているゆえ、彼らを非難するのに何の憚るところもない。

以上みてきたように、李商隱以外の詩人たちは、その詩の中で、誰も甘露の變の際の宦官側の行爲について觸れていないのである。

三

李商隱は「感有り二首」第一首に次のように詠ずる（唐詩百名家全集所收『李商隱詩集』巻中による。かなり難解なので解釋を附す。以下巻數のみ示し、必要に応じて解釋を附す）。

九服歸元化 九服は元化に歸し

三靈叶睿圖 三靈は睿圖に叶ふ

如何本初輩 如何ぞ本初の輩

自取屈籠誅 自ら屈籠の誅を取れるや

有甚當車泣 車に當りて泣かしむよりも甚しき有り

因勞下殿趨 因つて殿を下りて趨るを勞す

何成奏雲物 何ぞ雲物を奏すを成せしか

直是滅雀蒲 直だ是れ雀蒲を滅すのみ

證遠符書密 證遠び符書密かに

詞連性命俱 詞連なり性命俱にす

竟緣尊漢相 竟に漢相を尊ぶに緣り

不早辨胡雛 早には胡雛を辨ぜず

鬼籙分朝部 鬼籙 朝部を分ち

軍烽照上都 軍烽 上都を照らす

敢云堪慟哭 敢へて慟哭するに堪ふと云ふも

未免怨洪爐 未だ洪爐を怨むを免れず

唐の全土は藩服に至るまで天子の徳化に歸順し、日月星の天象は天子のすぐれたお考えと調和している。どうして李訓と鄭注は、かの袁紹のように宦官を誅せんとして、逆に劉屈氂のように宦官に殺されるような結果を自分たちから招いたのだろうか。宦官たちを一舉に誅滅しようとした彼らの企ては、かつて爰盎が天子を諫めて天子の輿に陪乘していた宦官趙談を下ろさせくやし泣きさせたよりも一層甚しいものであったが、その企ては失敗し、そのため、かえって天子が殿を下って走ることになり、宦官たちによって宣政殿の中に連れもどされたのである。どうして甘露降ると奏上したりしたのだろうか。それは瑞祥の報どころではなく、大臣たちはまるで盜賊同然に討滅されてしまった。李訓らの謀と關わりがあるとな疑われた者は捕らえられ、逮捕狀が宦官たちによって隱密裏に發せられた。何の關わりもない者まで、無理矢理自白の書を書かされ、李訓らと運命を共にしたのである。結局、天子は容貌ばかりが立派な漢相のごとき李訓を尊んで宰相としたの

で、晉の王衍のように、子どもだった石勒を見て後の禍いとなることを豫見したほどの見識をもった側近とてなく、鄭注のような奸臣を早くに見抜けなかった。過去帳には朝臣の半ばまでが名前を列ね、軍隊ののろしの火が戒嚴令下の長安を照らした。なんとか慟哭するのをこらえようと言ってはみても、こんなことになつたのは天のせいではないかと怨まずにはいられないのである。

「乙卯の年感有り、丙辰の年詩成る。」と題下に自注があること、宋の蔡啓のいうとおりである。第三聯について、解釋に示したように、上句に、『爰盎伏車』の故事（馮浩注『玉谿生詩集箋註』卷一に『漢書』袁盎傳を引く）を、下句に「爰惑（火星）南斗に入れば、天子殿を下りて走る。」という大通年間（五二七～五二九）の諺（朱鶴齡注『李義山詩集』卷中に『梁武本紀』を引く）をそれぞれ典據としたのは、安徽師範大學中文系古代文學教研組選注『李商隱詩選』、陳永正選注『李商隱詩選』いずれも、それらの典故を探るによる。

上句について、朱鶴齡注は

〔魏志〕嘉平六年。景王廢帝。遣使者授齊王印綬。當出就西宮。帝受命。遂載王車。與太后別。垂涕。始從太后殿南出。羣臣送者數千人。司馬孚悲不勝。餘多流涕。（傍點筆者、以下同じ）

と、魏の齊王芳が廢位され、宮廷を出てゆくとき、車に乗って泣いたことを典據とし、下句について、馮浩注は

〔後漢書虞翻傳〕詔案中常侍張防。屢寢不報。詔坐論輸左校。防欲害之。宦者孫程張賢相率奏曰。常侍張防。賊罪明正。反構忠良。今客星守羽林。其占。宮中有姦臣。宜急收防送獄。時防立在帝後。程叱曰。何不下殿。防不得已。趨就東廂。

と、宦官張防の汚職を訴えて、獄に繋がれた虞詡を救おうと、宦官孫

程と張賢が天子に奏上しているとき、張防が天子の後ろにいたので、孫程は「何ぞ殿を下らざる」と叱責し、張防はやむを得ず、小走りに東廂に就いた、という典故を示す。上句の朱注は、下句のそれと意味が重複するし、下句の馮注は、宦官が宦官を叱している點、あまりびつたりこない。「下殿趨」については、『新唐書』卷一七九李訓傳、甘露の變の際の記述に、

……宦人曰。急矣。上當還內。即扶輦決累寃下殿趨。訓攀輦曰。

陛下不可去。士良曰。李訓反。帝曰。訓不反。士良手搏訓而墮。

訓壓之。將引刀轉中。救至。士良免。……

とみえ、また杜甫の「收京三首」第一首にも「須爲下殿走。不可好樓居。」とみえる。やはり天子が殿を下り走ると考えるほうがよいであろう。

「感有り二首」第一首において、もっぱら李訓らの輕舉を筆誅した李商隱は、その第二首には次のように詠じている。

丹陛猶敷奏

形庭歛戰爭

臨危對盧植

始悔用龐萌

御仗收前殿

兇徒劇背城

蒼黃五色棒

掩遏一陽生

古有清君側

今非乏老成

素心雖未易

丹陛に猶ほ敷奏するも

形庭 歛ち戰爭す

危きに臨んで盧植に對し

始めて龐萌を用ゐしを悔ゆ

御仗 前殿に收まり

兇徒 背城よりも劇し

蒼黃たり五色の棒

一陽の生ずるを掩遏す

古へに君側を清むる有り

今 老成に乏しきに非ず

素心 未だ易からずと雖も

此舉太無名 此の舉 太だ名無し

誰限衛冤目 誰か限せん 衛冤の目

寧吞欲絶聲 寧くんぞ絶えんとする聲を吞まんや

近聞開壽讌 近ごろ聞く 壽讌 開かれ

不廢用威英 威英を用ゐるを廢せずと

天子に甘露降るの瑞祥が報告され、その眞偽を確かめようという李訓の奏上も終わらぬうちに、宮中の庭ではたちまち戦いが始まってしまった。この宦官誅滅に失敗し事態の收拾を計らねばならない危急のときに臨んで、天子はやっと、古えの忠臣盧植に比すべき令狐楚をお召しになり、はじめて、かの光武帝に仕えて信任されながら謀反を起こした逆臣龐萌のような李訓らを重用したことを後悔なさったことであろう。事件當時、天子は宦官たちに連れられて前殿に入られ、宦官が率いる禁兵たちの戦いぶりは城を背にしたときよりも激しく凶暴だった。曹操が禁法を犯した者を殺すに使ったという五色の棒が忙しく振るわれたかのように、多數の死者が出て、冬至の日は萬物を生成する陽氣が生じることになつてゐるのに、その日を前にしてこんな慘事が起こり、その陽氣が生ずるのを塞ぎ止める結果になつた。昔は君側を清める忠臣がいたし、今でも經驗豊かな年配の臣下がいけないわけではない。李訓らが宦官の弊を除きたいと思ふその本来の心は、輕々しいものではなかつたであろうが、彼らが宦官を誅殺しようとした行爲は全く大義名分が立っていないかつた。誰が冤罪を受けて殺された恨みに開かれた眼を閉じられよう。死なずにすんだ者として、どうして憤怒に絶えんばかりの嗚咽の聲をこらえられよう。それなのに近ごろ聞くところによると、中央では祝宴が開かれ、甘露の變

で殺された王涯が定めた咸池・六英のような音楽をやめないそうである。

第二聯には「是の晩 獨り故の相彭陽公のみ召して入らしむ」と自注がある。以前の宰相彭陽公とは、李商隱の最初の庇護者令狐楚のことである。張采田年譜によれば、李商隱は元和七年（八二二）に生まれ、長慶元年（八二二）十歳のときに父を亡くし、大和三年（八二九）十八歳にして、天平軍節度使令狐楚の幕に従い、巡官となつてゐる。その後、大和七年六月、令狐楚が太原尹、北都留守、河東節度使から、吏部尚書として内官となると、李商隱は令狐楚の幕僚をやめ、大和八年には一時、兗海觀察使崔戎のもとに身を寄せていた。この間、李商隱は大和六年、八年と二度科擧に應ずるが落第している。事件當時、令狐楚は守尚書左僕射として宮中にいて、この流血沙汰を目の當りにしたにちがいない。李商隱も、おそらく科擧受験のために長安にいて、事件を見聞したことであろう。李商隱の詩の内容から推して、事件の模様を令狐楚から直接知らされた可能性が強い。

令狐楚の行動について、『資治通鑑』卷二四五文宗太和九年の條に次のようにみえる。

十一月……癸亥の日（二十一日）、百官が入朝し、日が出てからはじめて建福門が開いた。ただ従者一人だけの隨行が許され、禁兵が刀を抜いて道の兩側に立っていた。宣政門まで來ても、まだ門は開かない。このとき、宰相や御史の席次をつかさどる者はなく、百官もやはり席次がなかった。天子は紫宸殿にお出ましになり、お尋ねになった。「宰相はどうして來ないのか。」宦官仇士良は「王涯たちは謀反を起したので、獄に繋がれています」とお答えし、王涯の自白狀を天子に差し出した。天子は左僕射令狐

楚、右僕射鄭覃らを召され、殿に升らせ、その自白狀を示された。天子は悲憤のお心に堪えられず、令狐楚たちに「これは王涯の自白狀か」とご下問になると、「そうです」との答え。天子は「本當にそうならば、その罪は誅せらるるだけではずむまい」と。そこで令狐楚・鄭覃に命じて、中書に留宿させ、機密の政務を執らせた。令狐楚に制を草させ、中外に宣告させた。令狐楚は王涯・賈餗の謀反について、その述べ方に眞實味がなかつたので、仇士良らは不愉快に思い、それゆえ令狐楚は宰相となることができなかつた。……甲子の日（二十三日）、右僕射鄭覃を宰相とした。『通鑑』によれば、令狐楚が天子に召されたのは事件の翌日であり、しかも令狐楚ひとりだけではなく、右僕射鄭覃も召されたとみえる。また、『新唐書』卷一六六令狐楚傳には、

李訓の亂に遇い、將軍や宰相はみな神策軍に捕らわれた。文宗は夜、令狐楚と鄭覃を召して禁中に入らせた。令狐楚は建言した。「外に三司御史がありますし、さもなければ、大臣が審議にあずかるものです。禁軍は宰相を囚えておく所ではありません。」天子は領かれた。やがて令狐楚は詔を草したが、王涯・賈餗は冤罪ゆえ、その罪を指斥するのに切實さがなかつた。仇士良らは令狐楚を憎らしく思った。當初、天子は令狐楚を宰相に任じようとしたが、それは果されず、更わつて李石を用い、令狐楚を鹽鐵轉運使とした。

とみえ、『舊唐書』卷一七二令狐楚傳にも「十一月、李訓亂を求め、京師大いに擾る。訓亂するの夜、文宗 右僕射鄭覃と楚とを召し、禁中に宿せしむ……」とみえる。新舊『唐書』によれば、文宗が令狐楚らを召したのは、事件の起きた日の夜のことである。李商隱が令狐楚

だけ召されたというのは、宦官たちの横暴にせめてもの抵抗を試みた令狐楚の行動を是とし、宦官たちに逆らわず宰相となった鄭覃の方をことさら無視したのではなからうか。あるいは牛僧孺派の令狐楚と、榮陽の鄭氏として知られる北朝以来の士族の出で、李德裕派の鄭覃とは、もとより黨派が異なるゆえか。いずれにせよ、李商隱が「感有り二首」のような事件に密着した詩を詠じた背後には、令狐楚の事件における言動があったのである。

李商隱は「感有り二首」に續けて「重ねて感有り」(卷中)にも次のように宦官に対する憤りを詠じている。

玉帳牙旗得上游 玉帳 牙旗 上游を得

安危須共主分憂 安危 須らく主と共に憂ひを分つべし

寶融表已來關右 寶融の表 已に關右より來れり

陶侃軍宜次石頭 陶侃の軍 宜しく石頭に次すべし

豈有蛟龍愁失水 豈に蛟龍の失水するを愁ふること有りて

更無鷹隼與高秋 更に鷹隼の高秋に與がる無からんや

晝號夜哭兼幽顯 晝號夜哭 幽顯を兼ね

早晚星關雪涕收 早晚 星關 雪涕收まらん

昭義軍節度使劉從諫の軍は、その軍事上、長安に出兵するに有利な位置にあり、危急のときは當然主君と憂いを分つべきである。

かの寶融が關右から、光武帝に隗囂を討つ時期をうかがう上表をしたように、劉從諫も宦官を非難する上表をすでにしていたからには、東晉の陶侃が石頭に軍を率いて蘇峻を討つて天子を救ったように、長安に軍を率いて宦官を討ち、天子を救うべきである。どうして蛟龍が水を失うように天子が權力を失って愁える道理があるらうか。そのうえ、鷹や隼が秋空に高く飛んで小鳥を逐うよう

に、宦官を誅する忠實な猛將がいはいはざがあるらうか。甘露の變以來、晝も夜も、寃罪に死んだ者も死なずにすんだ者も、悲憤して泣きやまない。いったい何時になったら宦官の恣横を矯め、天子も臣下も官廷全體が涙を拭うことをやめられるのだらう。

この詩は「感有り二首」とちがって、元好問の『唐詩鼓吹』に選ばれているが、『唐詩鼓吹註解大全』卷六の明の廖文炳の註解には「此の詩は前功を追憶して作る也。……」とみえ、そのころは甘露の變にかかわる詩と解釋されていなかったことがわかる。

昭義軍節度使劉從諫が王涯らの殺されたことと宦官仇士良の横暴を不服として上表したのは、『資治通鑑』卷二四五によれば、開成元年(八三六)すなわち事件の翌年の二月と三月のことであり、『舊唐書』卷一六一劉從諫傳には四度、『新唐書』卷二一四の傳には三度上表したとみえ、いま『全唐文』卷七三三に「王涯等の罪名を請ふの表」一文のみ遺っている。

李商隱はもとより宦官誅滅を企てた李訓・鄭注に對して批判的であった。特に鄭注については、開城二年十二月、興元尹、山南西道節度使として卒した令狐楚の葬饌を終え、長安に歸る途中の作「行きて西郊に次る作一百韻」(卷下)の中で、

近年牛醫兒 近年 牛醫の兒

城社更拔緣 城社に更に拔緣す

盲目把大旆 盲目にして大旆を把り

處此京西藩 此の京西の藩に處る

樂禍忘怨敵 禍を樂しみて怨敵を忘れ

樹黨多狂狷 黨を樹てて狂狷多し

生爲人所憚 生きては人の憚る所と爲り

死非人所憐 死しても人の憐む所に非ず

快刀斷其頭 快刀 其の頭を斷ち

列若猪牛懸 列ねらるること猪牛の懸けらるるが若し

と、その愚昧にして權力を貪るさまを詠ずる。しかし、李商隱が他の詩人と異なるのは、やはり宦官についても筆誅している點である。

むすび

甘露の變をめぐる詩人たちの反應は、それぞれの立場や心境のちがひによって、詩作の上に興味深い相異となつて表れている。白居易の傍觀者的な反應も、杜牧の友人への同情から發する李訓・鄭注に對す非難も、それぞれに詩人の立場や心境を考えると、頷けるのである。ことに事件の性格上、宦官について觸れることは最も避けなければならぬ。皇帝の廢立さえ自由に行っている宦官に逆らうことは、左遷どころか、生命の危險を伴つた。強力な藩鎮の劉從諫でさえも「臣身みづから闕庭に詣り、藏否を面陳せんと欲すれども、並びに擊戮に陥り、事も亦た成る無きを恐る。謹んで封疆を修飭し、士卒を訓練し、内には陛下の心腹と爲り、外には陛下の藩垣と爲らん。如し姦臣の制し難くんば、誓つて死を以て君側を清めん。」(「王涯等の罪名を請ふの表」と、自分では殺される危險を冒してまで官廷に參上できないと上表しているのである。まして内官だつた令狐楚の言動は、宦官に對する精一杯の抵抗であつたにちがいない。そして、李商隱の宦官を筆誅した詩は、彼の庇護者であつた令狐楚の宦官に對する抵抗と呼應している。令狐楚の姿勢に動かされたからこそ、李商隱は他の詩人たちが觸れようとなしな宦官について、敢えて詩に詠じたのだと思う。李商隱のように、まだ身は布衣であつて、事件に近かつた令狐楚と心中通じ合つて

いた詩人が、最も事件の核心に迫る詩を作り得たのである。ただ、李商隱が得たこうした偶然ともいふる立場だけで、事件についての詩の全てを説明しきれぬわけではない。たとえば「寶融の表已に關右より來れり、陶侃の軍宜しく石頭に次すべし」のような典故運用の巧みさなど、李商隱でなければ、こうまで精緻に意圖を潛めた表現はできないのではなからうか。やはり、甘露の變の際の詩にも、充分李商隱らしさが發揮されているのである。

注(1) 甘露の變とその事件について詠じた詩人たちについては、すでに小川昭一「宦官についての詩」(『全唐詩雜記』および同氏「唐詩における政治批判の態度」(『日本中國學會報』二十六 一九七四)に取り上げられている。

(2) 甘露の變を專論したものととして、例えば湯承業「論李訓所以敗於仇士良——「甘露之變」的檢討——」(『食貨』月刊復刊三一七 一九七三)、横山裕男「甘露の變」始末——唐代政治史の一齣——」(『長野大學紀要』五一 一九七五)が挙げられる。

(3) 平岡武夫編「唐代研究のしおり」一「唐代の曆」によれば、大和九年の冬至は十一月丙寅、すなわち二十五日であり、甘露の變が起きた日から四日後である。

(4) 提要の記述について、詳しくは近藤光男「唐詩集の研究」二二六頁參照。

(5) 『漢學研究』十三・十四 内野熊一郎先生退任紀念號 一九七五 所載

(6) 『中國文學報』二八 一九七七 所載

(7) 「李給事一首」が二首同時期に作られたとして、『新唐書』卷四七百官

志に「左諫議大夫四人……建中二年、御史中丞を以て理匭使と爲し、諫議大夫一人、知匭使と爲る。匭に投ずる者、先づ副本を驗せ使む。開成三年、知匭使李中敏以て聰明を廣うして幽枉を慮る所以に非ずと爲す也、乃ち奏し副封を驗するを罷む。」とみえ、新舊『唐書』本傳によつて、李中敏が知匭使として奏上して給事中になり、それから仇士良に逆らつたことがわかるので、杜牧は少くとも開成三年より後、李中敏が開成末に死ぬまでの間にこれらの詩を作つたはずである。

(8) 『梁書』卷二武帝下および『南史』卷七梁本紀中(ともに中華書局排印本)には、中大通六年「夏四月丁卯。發惑在南斗。」とみえるだけで、朱注に引く諺はいずれの梁武本紀にも見出せない。

(9) 『三國志』卷四三少帝紀の注に引く『魏略』にみえる文で、「太后殿」は「太極殿」、「送者數千人」の「千」は「十」となっている。

(10) 『唐詩百名家全集本』は「未易」を「永易」に作るが、いま他の諸本がみな「未易」とするのに従つた。

(11) 馮浩は王涯の定めた雲韶樂に結びつけるが、朱鶴齡は釋道源の注を引いて、令狐楚が事件の翌年に天子の賜つた宴會に、大臣が誅されたばかりゆえ、病氣と稱して出席しなかつたことに結びつける。また、張采田は年譜の開成元年の編年詩に、天子が廢位されなかつたことを喜んでいるのであるといい、諸説いずれとも決しがたいが姑く馮浩に従う。